
鏡華乱鬼 - KYOUKARANKI -

白猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡華乱鬼 - KYOUKARANKI -

【Nコード】

N9837P

【作者名】

白猫

【あらすじ】

ちよっとした事件からあかつき つくも いがらし暁月雲は五十嵐かえで楓と共に行動するようになったが、様々な怪奇が月雲達を襲う。

No.1 鏡

ちよつとしたことから僕は知らない世界の住人となった――

えつと桐崎高校の女子より平和を愛する二年生あかつき 月雲つくもです。

「えゝ今日の授業は終わり！このあとは昼飯だからあんまりさわくなよ」

斉藤先生が終わりの号令をすると、皆が一斉に話しをし始めた。

「ちなみに俺は愛弁当だ！暁よなにをみている。……っ！これは渡さんぞ！！」

なんでそうなるんですか……。ってかいません。

「月雲！はやくメシ買いに行こうぜ！」

後ろの同級生がそう言いながら僕の肩を強く掴んだ。

「イタっ！痛いよ直泰君なおや、まったく」

「わりいわりいまあ兎に角はやく売店に行かねーと昼飯食えなくなるぞ！？」

直泰は焦りながら言って今にも走り出しそうだった。

「わかったよはやく行こっ！」

そう言って二人は売店に向かって駆け出した。

「ところでお前は女できたか？」

「ぶっ!？」

月雲は予想外な直泰の質問に思わずおにぎりを吹き出してしまった。

「い、いきなりなに变なこと聞くのさ!ゲホッゲホッ!」

「いや俺は結構まじめなんだけど、んでできたのかよ？」

「そんな恐ろしいのを僕がつくと思う?」

デザートのあんぱんにかぶりつきながら質問に答えた。

「勿体ねえ絶対に勿体ねえって…だってお前さあその顔でやったら一発OKになるはずなんだよ…女顔なんだから——ぐふっ!？」

女顔にカチンと来たのであんぱんを直泰君の顔面に投げつけてみた。

「なにしゃがるっ!」

「許してっ!」

月雲はしたから直泰を上目遣いで訴えかけた。

「ぐ、なっ!?!あ、ああ今度から気をつけるよ」

「ふ、ふふふっ」

上目遣い作戦成功！

なにしてんだる僕…。

「なあ、ああーっ！！」

しばらく教室に月雲の叫び声が響いていた。

刻々と学校での時間が過ぎていき帰りのHRにまで差し掛かっていった。

「さあって一緒に帰ろうぜ月雲」

「わかった」

帰りの支度をして、バッグを持って校門を出て学校を後にした。

僕と直泰くんは帰り道に色々と話していた。中学校のときの思い出、そして直泰くんの青春話を聞かされていた。まあ僕には当分無縁な話だと思っけれど。

「んでさあ、あの時の俺なんて言ったと思う、まあそう焦るな」

僕が今なにをどう焦った！？

「こう言っただ、俺の背中について来いってな！それでさ彼女が

な――」

「えっとそ、そろそろあのお…うん、そうなんだ…」

そろそろ家に帰りたと言おうとしたが話の区切りがわからなくて結局、10分ぐらい続いてやっと終わった。

満足そうな顔をした直泰くと分かれて帰路を歩いていると後ろから視線を感じたので振り向いてみると眼があるような物は無かったが三面鏡が開いた状態で置いてあった。

「あれ、こんな所に三面鏡なんて置いてあったっけ？」

不自然に思いながらも誰かが捨てて行ったのだろうと考え、視線のことも気にしない様にした。

No.2 鬼

直泰からの長い話の相手をされてしまい疲れがドツと溜まっていたので月雲は家に帰ってすぐに制服のままベッドにダイブした。

「はあゝ疲れたあ、直泰君の話長すぎ」

「ミヤ」

ベッドからはみ出て床に向かってダラゝとした手をフワフワとした綿のような毛が撫でていた。

「へへッ！くすぐったいよおハク」

白い猫は軽く跳躍をすると僕の目の前に飛び乗って繰り返して鳴いていた。

「ごめんごめん君にまだご飯をあげてなかったね」

暫くハクの頭を優しく撫でてから重い体を動かしキッチンに向かってスタスタと歩いていくと後ろからハクが小さな足を素早く動かして必死について来ていた。フードをハク専用のお皿に入れてハクの前に置いてあげると勢いよくお皿に顔を突っ込んだ。

お皿から顔を上げると鼻や目の周りに小さな魚の肉がついていた。よっぽどお腹が減っていたらしい。

「あつ、お母さん達のお供え物もしなきゃ！」

ハクが一生懸命に食べているのを横目に急いで銀色の小皿に白いご飯を盛って、仏壇に置いて手を合わせた。

おじいちゃんによると、お母さんとお父さんは僕が産まれた時の事故で亡くなったらしい。でも食費とかはおじいちゃんが送ってくれるから特にお金には困っていない。それにハクもいるから寂しいと思ったことは無い。部屋は静かすぎるけれど。

「ふうなんとか1日終わったあ」

力が抜けたと思ったら不意に寝てしまった。

真夜中に突然した大きな物音によって僕は起こされた。固く閉じた瞼をゆっくり開いた。真夜中というだけあって外は真っ暗な闇の样だった。

幸い仏壇がある和室だけは明かりが付いていて少しだけ怖さが紛れていた。

ドンッ！

何かを叩くような音が暗い廊下から響いていた。気になり廊下にてみたものの廊下の暗闇に和室の明かりが入って、なんとも言えない薄暗さが不気味に思えた。

今も尚続く音は洗面所の方からしていることが分かった。音に怯えながらもゆっくり歩きやつとのことで辿り着くとハクが洗面所にフウツと唸り威嚇をしていた。

「ハクどうしたの、はやく戻ろう——……っ!？」

何に対してそんなに怯えているのか気になったので洗面所の電気の

スイッチを押しながらハクに声をかけた時、目の光景に驚愕していた。

「な、なんだよこれっ!？」

その時僕が目にした物は……。

洗面台にある血塗れの鏡だった。

ドンッ!!

さらに大きな音となり僕の耳に入ってくる。その音は僕のすぐ横浴室からしていた。すると突然ドアの曇りガラスに鬼のような形相をした男の顔が浮かび上がった。

「うわあああっ!!」

急激に怖くなりハクを抱え、跳ぶように洗面所を走り出た。その瞬間浴室とリビングの方からガラスが割れるような音がした。

急いで玄関の扉を殴るように開けて家を飛び出た。

ハクを抱えたまま道路を走り続けたがまだ後ろから重い足音が聞こえてくる。更に速く足を動かそうとしたとき、自分の足に引っかかってしまい転んでしまった。月雲は急いで立ち上がったが振り返ると青白い肌に人とは思えないほどの大きな牙を持ったまるでゾンビのような男が数センチの所まで来ていた。

「こ、殺されるっ!」

ハクを思いつきり抱きしめ覚悟をした時前方から声が聞こえた。

「伏せてっ!!」

No.3 瑠璃

伏せてとの声が響いていたが完全にパニックに陥っていた月雲にはそんな声も届いてなく、目の前の化け物に立ち尽くすことしか出来なかった。

「ど、ど、どうしよう——イデっ！」

「だから伏せなさいって！！」

突然頭の上からズンと押された。すると僕の頭の上を人が通り過ぎた。

通り過ぎた人物は僕を飛び越えた勢いのまま男を手に使っていた小刀で頭を一突きしていた。

「あなた邪魔だからはやく消えて」

「え？っあの、はい…」

小刀を持った女の子に初対面で消えてと言われて軽くショックを受けていた。

暗いので最初は分からなかったが、彼女は長髪黒髪、そして色はみえなかったが髪飾りと瑠璃色をした着物を着ていた。

必死に今の状況を理解しようとしているとさっきまで刺された箇所を抑えていた男がこちらに向かって歩き始めていた。

「まだ生きてたの？鬱陶しい」

彼女は男に向かって鞘を投げた。その鞘は見事に顔面に命中しよるめいた。彼女は瞬時に男に近づいて小刀を両手で思いっきり男の胸目掛けて突き刺した。

「わっ！？こっち来ないでよっ！」

ふらついて傾いてきた男から小刀を抜き、蹴り飛ばした。男は急に青い炎に包まれ跡形もなく消えてしまった。

僕は目の前の光景が理解し難かった。なんであんな化け物が家にいたのかそれに彼女は一体なんなのか、色んな疑問が頭を混乱させた。「あら貴方まだいたの、消えてと言ったはずだけど？」

「え、あのごめん、じゃなくて！君は一体誰なの？」

彼女は僕に目だけを向けて答えた。

「…別に誰だって良いじゃない、それともどうしても言わなきゃいけない理由でもあるの？」

「い、いやそうじゃないけどあんな化け物を消しちゃうなんてすごいなあって」

僕は褒めるつもりで慌てて思いついた言葉を発した。そうすると突然彼女は鋭い目で僕を睨んだ。

「…魂を消すことはとても悲しく、辛いことよ」

それだけを言って彼女は僕に背を向け、立ち去ろうとしたときいつの間にか側にいたハクがまた唸りだした。

「あれ？」

今まで気が付いてなかったが彼女の真横には夕方、目にした三面鏡が置いてあった。

「……っ！？」

三面鏡を見つめていると夕方感じた視線を三面鏡から感じた瞬間、一瞬にして洗面所のときのように三面鏡が赤く染まった。

なにかヤバい感じがしたので急いで立ち上がり、無我夢中になって彼女を鏡から離すように突き飛ばした。

「いたっ！なにをするの！？」

どうやら彼女は鏡の異変に気付いてないようだ。

「いい加減どきなさいよ」

彼女は上から乗っかっている僕を睨み付けていたがそれどころではなかった。振り返り再び鏡に顔を向けると鏡から苦しそうな女性の顔が鏡を突き破るように出て来ていた。

「……っ！？——……」

家での男の顔がフラッシュバックした。声にならない声をだしたそこで僕の記憶は途切れ気を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9837p/>

鏡華乱鬼 - KYOUKARANKI -

2011年1月13日01時34分発行